

■はじめに

教育長在任の11年を振り返ってみると、前半は世界遺産学習を中心にして「奈良で学んだことを誇らしげに語れる子を育てる」ということをテーマに、後半は「ミネルヴァの鼻を育てる」という表現を使いながら新しい時代を生きていく人をいかに育てるかという話をしてきました。今日は私の最後の定例校長会となることから、これまで教育長としてどのような思いで教育に携わってきたのかを皆さんに伝えたいと思います。



■「用之則行 舍之則藏」

教育長室に「用之則行 舍之則藏」と書かれた色紙が置いてあります。この色紙は教育長を拝命した際に、当時教育委員長をされていた杉江雅彦先生からいただいたものです。この言葉は『論語』からとったもので、『用行舍蔵』という熟語のもととなった孔子の言葉（※裏面参照）であります。これは杉江先生からの「教育長という職務を全うしなさい。」という激励とともに、「引き際もしっかりと見極めなさい。」という戒めであったように思います。

この『論語』の言葉には続きがあって、弟子の子路が「一国の軍隊を率いて『いざ出陣』となったときは、先生は誰をお連れになりますか。」と孔子に尋ねています。孔子は、この問いに対して「素手で虎を討とうとしたり、徒歩で大河を渡ろうとしたりするような、無謀なことをやって、死ぬことをなんとも思わない人とは事を共にしたくない。

私の参謀には、臆病なぐらい用心深く、周到な計画のもとに確信をもって仕事をやりとげて行くような人がほしいものだ。」と答えています。こうしたトップとしての在り方も、私の11年間を支えるものでした。

教育長というのは、教育委員会事務局の長であり、同時に奈良市立学校65校24,040人の子供たちの教育の責任者です。さらに文化財保護や公民館活動、図書館活動といった奈良市の教育行政のトップとして責任のある立場にあり、何事に対しても軽々しく判断し、動くことはできません。そういった意味では、「臆病なぐらい用心深く、周到な計画のもとに、確信をもって仕事をやり遂げる」という姿勢を、事務局職員にも求めました。それが、私の教育行政11年間を通して変わらない姿勢であったと思っています。

しかし、現実の社会の中では、戦わなければならない「虎」もいたし、渡らなければならない「大河」



もありました。それは、学校を取り巻く様々な教育課題であり、激しい時代の流れです。現実から逃げることなく、しっかりと未来を見つめ、計画を立て、勇気をもって進んでいきます。私はそうした教育行政を進めてきたつもりです。今、国家としての危機管理体制が問われている新型コロナウイルスへの対応も同様です。

■ 事をなすに極端を想像す

新型コロナウイルスについては、今後どうなっていくのか予測ができませんが、それぞれの学校で最悪の事態が生じた際にどう対応していくのかということについて、しっかりとシミュレーションをして準備をしておいてほしいと思います。こうした危機対応については、これまでも度々『学問のすゝめ』

で有名な福沢諭吉の自伝書『福翁自伝』の言葉を引用して話をしてきました。それは「事をなすに極端を想像す」という見出しの中にある、

すべての事の極端を想像して覚悟を定め、マサカの時に狼狽せぬように、後悔せぬようにとばかり考えています。

という一文であります。あらゆる状況を想定し、最悪の事態までも想定して、今、何の手を打つべきかを考え準備をする。それが危機管理だと思っています。

今、まさしく私たちは危機管理に直面しています。自分の学校で子供や保護者、地域の人、教員が発症したら、自分たちは何をしないといけないのかを想像してください。この想像は私たちが経験のしたことのないことで、答えのないことです。どう判断し、どう対応しても必ず批判は出てきます。しかし、それを受けて立つのがリーダーです。そこを避けては通れないし、覚悟が必要です。

国、県、市、学校をあげての危機管理が求められている現在、子供を預かり、一番子供の様子を知っている先生方がどんな覚悟をもって危機対応に臨むのか。まさかの事態に、子供や保護者、地域の方々にどんなメッセージを出せるか、不安のない状況をどう作り出していけるかを考えてください。覚悟を定め、それぞれの現場で、極端を想像した危機管理をお願いします。

最後になりますが、学校長をはじめとする教職員全ての皆様に感謝するとともに、残された一か月間、しっかりと職務にあたっていきたいと考えています。長い間、ありがとうございました。

